

### ドル/円、昨秋に続く「50 年平均」上抜け攻防

ドル指数や対ポンド・対加ドルでは上抜け、追従焦点

(株) ジャパンエコノミックパルス

Japan Economic Pulse Co., Ltd.

[info@j-pulse.co.jp](mailto:info@j-pulse.co.jp)

2023/9/8 (金)

為替ドル/円は昨秋に続き、600 カ月 (50 年) 移動平均線という長期節目ラインの上抜け攻防に直面してきた。9 月 6 日時点では 148.22 円前後に位置しているが、コロナ危機以降の全般的なドル高もあって、ドルの総合力を示すドル指数や対英ポンド、対カナダ・ドルでは、すでに 600 カ月平均を上抜け突破している。米国での低インフレ・低金利時代の終焉や新冷戦入りと反グローバル化、世界的な高齢化の中での米国の相対優位といった半世紀 (50 年) スパンでの時代変革のなか、ドル/円も追従の上抜けが注目される。

#### 10-40 年の移動平均は上抜け、35 年平均上向き

「ドルは基軸通貨として幾つもの新たな課題に直面しているが、その地位は今後何十年にもわたって維持されるだろう」、「準備資産に占めるドルの比率はこの先さらに低下すると予想されるが、ライバル的存在であるユーロと中国人民元は、ドルを支える米国経済の規模と開放性や米国債市場の厚みと安全性という中核的な特質について、急に備えるのは難しい」――。

米格付け機関のムーディーズは今年 5 月、米債務上限問題などでドルと米国債の信用が揺らぐなか、このような見通しを示していた。

過去には米国で財務次官などを務め、クリントン政権時には為替ブレーンを務めた米経済学者のフレッド・バーグステン氏が、「基軸通貨の条件」として、貿易・投資力を含む大きな経済力、政府の介入や規制が抑制された資本・投資市場、資源エネルギー安保での優位性、基軸通貨を守る強い軍事力と安全保障力――を挙げている。各条件について現在は欧州、日本、中国などとの相対比較で、改めて米国とドルの優位性が際立つ時代環境となってきた。

その中で為替ドル/円では 7 月中旬からドルが再上昇となる中、足元では 600 カ月 (50 年) 移動平均線という長期節目ラインの上抜け攻防に直面してきた。9 月 6 日時点では、148.22 円前後に位置している。昨年 10 月時のドル高局面で同ラインは 150.72 円前後に位置していたが、同月のドル高値は近いレベルの 151.95 円前後となっていた。昨年 10 月の場合、日本の当局による市場介入でドルの上値は抑えられたが、日本の当局が 150 円前後や 600 カ月平均といった水準を政策的に意識しているか否かはともかく、当座は 600 カ月平均を巡る攻防が注目されそうだ。

すでにドル/円は日本での脱デフレ (デフレは通貨高の要因) や海外生産の定着による貿易黒字減の持

続、高齢化と人口減の本格化などもあって、1980 年代以降のドル安・円高トレンドは終焉が示唆されつつある。2017 年以降には、120 カ月 (10 年)、240 カ月 (20 年)、360 カ月 (30 年)、480 カ月 (40 年) の各移動平均線という長期節目ラインを相次いでドル高方向に上抜けてきた。

長期トレンドの方向性を示す各ラインの方向角度も、480 カ月平均以外は全て上向き化へと転換。昨年 10 月以降には、420 カ月 (35 年) 平均にまで上向き化が波及している。あくまでトレンド方向という点では、長期スパンでのドル高・円安トレンドへの転換が明確化されてきた。

為替相場でのドル全般はコロナ危機が一服してきた 2021 年以降、安全逃避需要や米 FRB による利上げ、米国経済の打たれ強さなどもあり、広範な通貨に対してドル高基調が続いている。その中でドルの総合力を示すドル指数 (米インターコンチネンタル算出の実効指数) は、昨年 3 月前後から 600 カ月平均を上抜け突破してきた。600 カ月平均の数値データがある 2016 年 12 月以降では、初の上抜け突破となっている。

#### ドル高と中露の通貨安、結果論として中露封じに

さらにドルは対英ポンド、対カナダ (加) ドルでも、600 カ月平均の数値が計算可能となった 2020 年 12 月以降、600 カ月平均を上抜け定着している。英ポンドと加ドルは日本円と比較で、1) 同じ G7 グループで変動相場制の通貨、2) 米国と貿易・経済・資本取引で関係が深い、3) 米国と軍事安保面で同盟関係にある――といった共通項がある。その意味で先行きドル/円についても、対英ポンドや対カナダ・ドルに追従する「ドルの 600 カ月平均上抜け」が注目されやすい。

ちょうど現在は 50 年という半世紀スパンでの時代変革として、米国での低インフレ・低金利時代の終焉や新冷戦入りと反グローバル化、世界的な高齢化の中での米国の相対優位 (他国比での若年人口の多さなど) といった現象が見られている。

同時に現在は AI (人工知能) の活用を含めて、世界的に貿易・消費などの商取引決済や金融取引、為替管理やヘッジなどで、「金融の IT デジタル化」が急拡大している。IT デジタル関連は米国の企業が世界的な覇権で優位にあるほか、国際的な規格や標準でも米国が主導権を握っている。米主導による IT デジタル化で採用される中心の通貨は、世界的に信頼性と流動性、汎用性、相互利便性、即時決済性などで優位にあるドルが選好されやすい。

また、新冷戦と中国・ロシアの脅威でいえば 1980 年代の東西冷戦時代、米国は「強いドル」を強化させて当時のソ連経済を弱体化させた。現在は結果論ながらも、ドル高と中国人民元安、ロシア・ルーブル安が加速されている。米国による「世界覇権争い」の中でのドル高活用や「ドル基軸通貨維持への強い覚悟」といった政策意図はともかく、ドル高が中国とロシアの経済を不安定化させる一因となってきた。

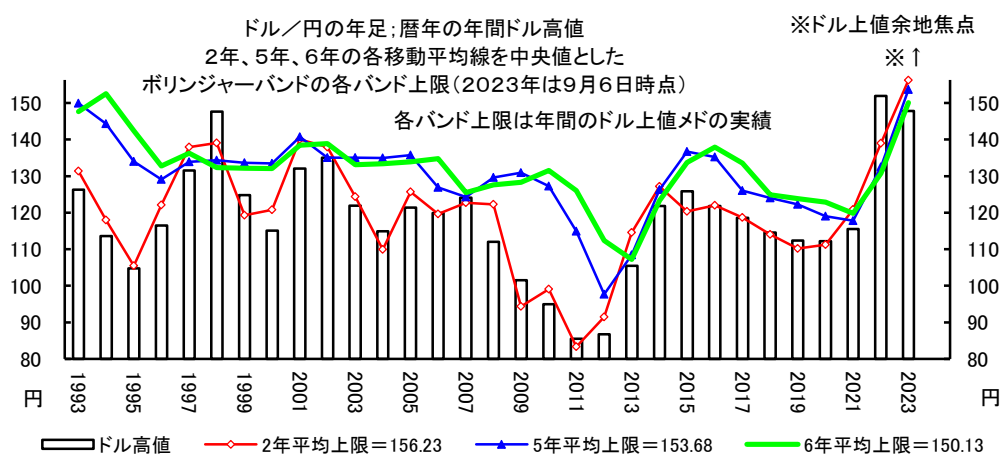
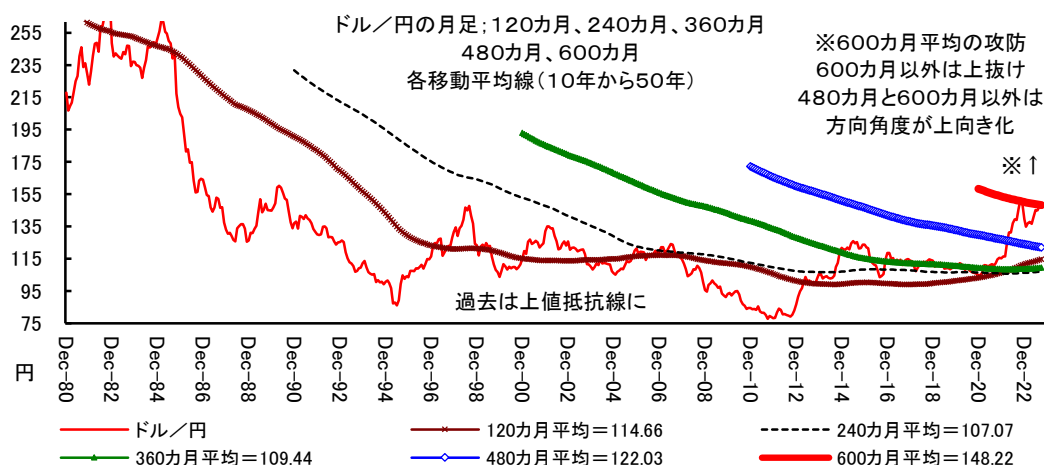
為替相場では短期的にも、改めてドルの上昇余地が着目されつつある。8 月後半以降には米国の金融機関から、以下のような分析レポートが散見されている。

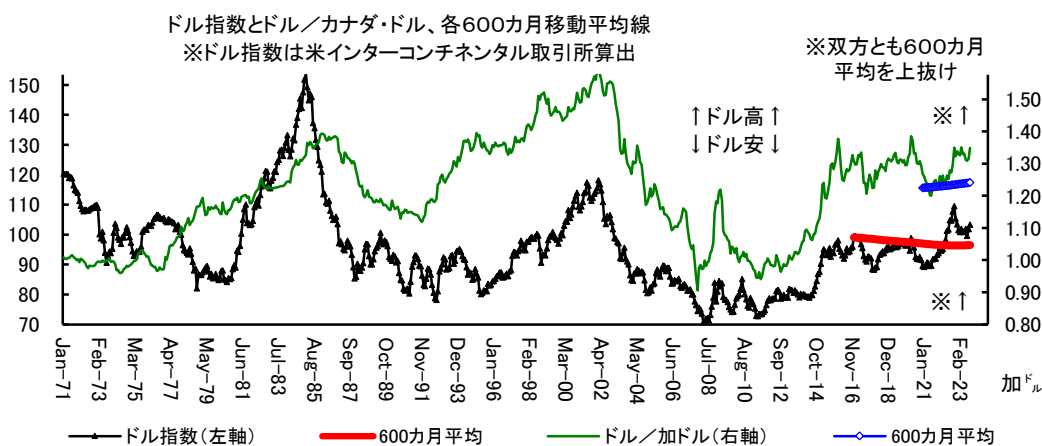
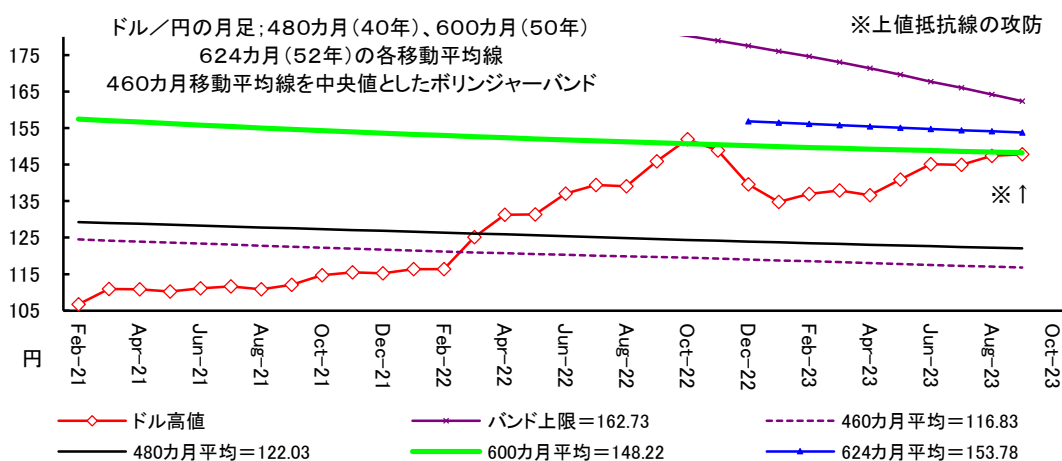
「底堅い米経済と米 FRB のタカ派（インフレ警戒）姿勢を背景に、欧州やアジアの成長が回復する兆しが見えるまでドルの上昇は続く」、「ドル/円は日銀がハト派的（利上げ慎重）姿勢を堅持すれば、今後 6 カ月で 1 ドル＝155 円を付けると予想」（ゴールドマ

ン・サックス）、「米経済と欧州や中国経済の健全性には大きな隔たりがあり、米雇用データは鈍化しているが、『米国例外主義』でドルは引き続き支えられる」（JP モルガン、以上、ブルームバーグが引用して紹介）。

当座のドル/円はテクニカル面でのドル上値メドとして、600 カ月（50 年）移動平均線の 148.22 円前後（9 月 6 日時点）のほか、昨年 10 月のドル高値 151.95 円前後、フィボナッチ分析での 1982 年以降におけるドル高値からドル安値の 38.2% 戻し 152.65 円前後などが注目されやすい。

より長期の年足テクニカルでは歴年別の移動平均を中心値としたボリンジャーバンドで、過去に年間での重要なドル高値メドになってきた 2 年移動平均が中央値でのバンド上限 156.23 円前後、5 年平均での上限 153.68 円前後、6 年平均での上限 150.13 円前後などが焦点になる（9 月 6 日時点）。





お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。